

2023 年度
自己点検・学校評価報告書

ルーテル学院中学・高等学校

2023 年度教育方針について

1. 2022 年度の状況と 2023 年度に向けての課題

新型コロナウイルス感染症の影響は 3 年目となり、少しずつ日常に戻りつつあるが、気候変動による休校や登校時間を遅らせるなどの対応が多かった。2023 年度より中高の全生徒がタブレット端末を持つことに合わせ、緊急時にオンライン授業への切り替えができるようシステムの策定と安全な運用に向けての研修を行いたい。

高校については定員に近い入学者数ではあったが定員を割る結果となった。特に 2 月の一般入試においては不合格者を多く出すこととなってしまった。

中学については定員を割ることとなった。高校とは異なり中学では経済的な公的支援がないとはいえ、より多く志願してもらえる魅力づくりが必要だと思われる。

また、在校生の中退者の減少については取り組みができなかった。

2. 学校の基本目標

・「来て良かった（在校生）」、「やって良かった（保護者）」、「出て良かった（卒業生）」、「働いて良かった（教職員）」学校を目指す。そのために生徒の「居場所」を設けることと「出番」を与えることに努力する。

・「育てたい生徒像」 __ 『あしたを拓く生徒』（仮） - 豊かな人間力と確かな学力 -

3. 具体的事業計画

(1) 施設計画

①100 周年に向けての本館改修として、教室床面の整地(全体的にデコボコしており、机がぐらついてしまう)や教室ドアのスライド化、エアコンの入れ替え、体育館の空調整備など、改修に向けて校内の必要な改修箇所を整理し、実行していく。

②旧プールの解体・更地化ができないか学院と協議していく。

(2) 教学面

①キリスト教教育の充実

a. 学院標語である「感恩奉仕」に示される建学の精神と教育理念を基にしたキリスト教教育の充実をはかる。

b. 教職員の教育力向上のため、興味関心に合わせた研修会等をオンラインも含めて実行していく。

c. キリスト教学校に務める教職員として教会礼拝への参加を奨励する。

②校務運営の充実

a. 校務・学習データのクラウド化を進め、端末内にデータを残さず安全に利用できる環境を整える。

b. 教職員間での情報共有と行動連携を測り、組織力を高める。

c. 学校が抱える問題について教職員全体で取り組み、解決できるよう、教員研修を計画的に実施する。

③高校新学習指導要領への対応と進路保障・ICT への対応

a. 3 観点評価において評価の在り方を見直し、よりよい評価となるよう修正する。

b. 生徒が主体的に活動できる授業を中心とした学習指導（教科指導）を通じ、授業力、担任力などの教師のスキルアップに努力する。

- c. 中高全ての学年で iPad を持つことに合わせて教員が使用する PC や iPad の整備を行い、教職員の利活用を含めて校務に必要なツールとなるよう使える努力をする。
 - d. ICT 支援員の導入による授業でのタブレット活用を促進する。
 - e. 緊急時にオンライン授業への切り替えができるよう、システムの策定と研修を行う。
- ④ 将来の社会を支える生徒の育成
- a. 自己コントロール力・表現力・対応力・忍耐力等の育成に努力する。
 - b. 「ルーテル区役所」のように生徒自身に社会の問題に生徒が自ら考えて行動できる力を育むことができる機会を与える。
 - c. 他の人たちと協力して課題に立ち向かうコミュニケーション力を育む。
- ⑤ いじめの防止や特別支援教育の充実と性同一性障害への対応
- a. いじめ事案等には早期発見できるよう適切な対応を図り、またその防止のためにも他への思いやりの心を育てるよう努力する。
 - b. 発達障害等の特別支援への組織的取り組みを継続する。不登校等による進路変更への対策を組織的に取り組む。
 - c. 生徒の多様性への対応については学校生活の各場面での配慮や教職員向けの研修を継続してガイドラインを作成し、学校として可能な範囲での支援の検討を行う。(LGBTQ へのガイドラインは 2023 年度より対応する。)
- ⑥ 生徒募集活動の強化
- a. 高校各コースの教育内容の見直しを行い、生徒の満足度を高める。
 - b. コロナ禍で縮小していたオープンスクール等を積極的に行い、受験へつなげる。
 - c. Web 出願への変更を視野に入れ、入試から教務・進路データへと繋がる一貫したシステムを検討する。
 - d. 100 周年に向け、学院全体の教育を協議し、ルーテル学院の特色ある教育に取り組む。
 - e. ホームページの更新や SNS 等の活用を促進し、外部への発信力を高める。
(学院教職員向けソーシャルメディアガイドラインについては法人にて作成中)
- ⑦ 国際交流プログラム等の充実
- a. インマヌエル・カレッジ (オーストラリア)・オークグローブ (アメリカ) 等との交換留学制度と短期研修の充実を図る。
 - b. 上記 a. 以外にもアメリカ・台湾等の高校・大学との連携も検討する。
 - c. アメリカ・韓国・ヨーロッパ等、海外研修旅行の検討を進める。
- ⑧ 中・高・大の連携
- a. 学院内の連携について具体的な教育プログラムへの取り組みを行う。
 - b. 必要な情報の交換を行い互いの理解を深めることで高大接続の拡大、強化につなげる。

学校関係者評価について

日時：2023年10月25日（水）10時～12時

場所：ルーテル学院中学・高等学校

学校関係者評価委員：

日野 正人：保護者・PTA 会長

村本 聡子：卒業生・のいばら会会長

堂原 秀文：黒髪地区・サンエス設備

森本 和幸：企業・TKU ヒューマン・大学卒業・学院モニター

岡村 健太：大学・児童教育専攻 専攻主任・講師

学校参加者：

鶴山校長、田仲教頭、牧高校部長、永守中学部長、綾垣事務長

※事務・記録担当：坂口課長

内容：

- (1)、開会の祈り
- (2)、学校関係者評価委委員と学校関係者の紹介
- (3)、授業参観・施設見学

中学：「国語 J1-1」 担当 木村 志生乃

高校：「公共 S2-9」 担当 嘉村 潔高

校舎内見学：中学棟、高校本館、旧プール跡地、体育館など

- (4)、学校の近況および今後について

受験者状況の説明、中学については、受験者数や合格者数は例年と変わりはないが、入学者数が例年より少なく、53名となった。今年は2クラスとなった。

高校については、ここ数年350名を超える入学者があったが、今年は309名と例年に比べて、高校も少なかった。定員を厳守するため、320名を目指した結果ではあるが、結果的に定員割れになったことは今後、入試対策委員会や総務部を中心に分析していきたい、320名確保をめざしていきたい。

また、今年度の入試から中学、高校ともWEB出願に変更することになっている。WEB出願システムはBLENDを使用する。他校と違うシステムを使うが、入試から入学、授業、成績などもすべて組み込んだ校務支援システムを使うことで生徒の情報を一元管理していくことを目指している。他校と違うシステムを使うため丁寧に説明をしていきたい。

10月21日には学院祭を開催し、久しぶりに生徒の保護者や家族などにも一般公開する形での学院祭を開催することができた。

TSMC関係では現在3名の台湾出身の生徒を受け入れており、AOBA国際ショナルスクールと提携して対面とオンラインのハイブリッド型で授業展開を行っている。さらに11月より1名の受け入れをする予定である。卒業する時には、GLDプログラム修了の卒業資格が受けられ、国内外の大学受験を目指す生徒を支援していく。

100周年についてのとりくみは、まずロゴマークとキャッチフレーズ「百年の祈りを未来のチカラに」が出来上がって、パンフレット等には記載されている。学院全体で取り組んでおり、今後100周年専用のホームページなども立ちあげる予定にしている。

ICT整備関係については生徒に対して全学年一人1台iPadを整備することができ

た、全教室に高校はプロジェクター、中学は電子黒板を設置している。

また今年は教職員へPCとiPadを配布し、さらに教育機関では全国的にも先進的な取り組みになる「ゼロトラスト環境」を整備し、教職員が安心して情報へアクセスできる校務支援を充実させ、情報漏洩対策、働き方改革へとつなげていきたい。

大学受験については総合型選抜が本格的になってきているなか、高校生活でのより充実した取り組みが必要になっている。本校では、総合的な学習の時間だけではなく、昨年度より「生きる力、学びのその先へ」と題して「ルーテル区役所」というバーチャル区役所の活動に取り組んでいる。地域の問題点などを、生徒自身で考え取り上げ、地域の各種団体と協力して課題を解決する取り組みとなっており、生徒自ら学び、自ら考え判断して行動する取り組みとなっている。

(5)、学校評価アンケートの説明

実施した学校評価アンケートの結果について説明を行った。

気になる点は、まだまだボランティア活動の参加が少なかったことや、学校行事の満足度が少なかったように感じている。コロナ禍のなかであったこともあるが、前年度と比べると少しずつではあるが、回復傾向にあることがわかる。

前年度と比較して改善したのは、まずはアンケートの回答率が50%だったのが、80%になった。前年度より紙面でのアンケート回収からWEBでのアンケートに変更したところ、回答率が下がってしまったため、多くの生徒が回答しやすいように工夫をし、より多くの生徒保護者が回答できるように工夫をして、回答率を上げることができた。

アンケートの結果で、特に気になる点は中学では学校行事の評価がコロナ禍の中でも工夫したため、満足してくれたことがわかる。高校では、わかりやすい授業の項目が評価が下がっているので、学校でも検討し、改善していく必要があるように考えている。

(6)、意見交換

評価委員の皆様から学校への意見や授業参観の様子、学校見学での感想をいただき、それぞれの委員の質問に学校側は答えた。各委員の意見や質問は次のとおり。

- ・授業の風景がICTを活用した内容に変更になっており、先生たちも対応していることが授業参観をしたことでわかった。
- ・高校は就学支援金が充実しているのに対して、中学生に対しては支援がないことは、PTAとしても県などに要望していきたい。
- ・コロナにより、授業風景が変わったようにも感じる。
- ・ひとりひとりを大事にしてくれている学校の校風があると感じている。卒業生のかたからも声をよく聞く。
- ・企業でも何か一つナンバーワンになることを目標にしている。ルーテル学院も何か一つナンバーワンになることを目指してほしい。
- ・もっともっと地域と一体化になることが学校には必要ではないか。
- ・ビジョンを持っている、夢を持っている大人が少なくなっている。学校現場でもビジョンや夢を語れる生徒たちになるように目指してほしい。
- ・ルーテル区役所の活動は素晴らしいと感じているので、もっともっと地域や企業、行政も巻き込んで一体化になるといいのではないかと感じた。
- ・クラスに授業訪問に行ったときに成績の状況が掲示してあり、優しい励ましだけではなく、厳しめの先生の意見があり、非常に感心した。
- ・各コースに生徒や保護者が求めるものが違うと思うので、評価アンケートもコースご

とに集計すると違いが見えてきて、もっと細やかな改善ができるのではないかと感じた。

- ・iPad で授業すると画面を教員側から見るできないので、どのような工夫をしているのかが気になった。中には授業についてきていない生徒もいるかもしれないが、iPad ではわかりづらいのではないかと考えるので、工夫が必要だと感じた。
- ・授業の工夫はすべて iPad でということではなく、教科の特性に応じて、使い分けていく必要がある。
- ・中学では授業参観を行っているが、高校では教室がせまく授業参観は難しいかもしれないが、工夫をしてもっといろいろなひとに開かれた学校にしていくことが必要ではないか。
- ・評価アンケートについて、見方がいくつかあるので、数字では 100%を目指す項目と、100%の自己申告を安心してはいけない項目があるので、そこを注意してみていく必要がある。
- ・大学が同じ立地になるので、ぜひ一緒にできることがあれば取り組みたい。
- ・高校で講演したときに、大学の研究室に高校生が質問に来てくれた。非常にうれしかったので、このように高校生が大学に自由に足を運べる環境があるといいと感じた。

今後の改善方策

評価委員の方に iPad を用いた授業を複数見ていただき、昔の授業とは異なっていることを感じていただいた。ただ、生徒たちがその新しい形で、十分ついていけているのが課題になるとのご指摘をいただいた。

「生徒・保護者アンケート」に関しては、昨年度の自宅での WEB 上での入力十分に伝わっておらず、回答率が生徒・保護者共に悪かった点が大きく改善されていたことは良かったと言っていた。また、アンケート結果の見方として、単純に数字が良い悪いだけでなく、その数字の背景を考えると教えていただいた。

一方で、昨年度に引き続き、「ルーテル区役所」など地域の活性化につながる取り組みが素晴らしいとお褒めの言葉をいただいた。引き続き地域と連携し、生徒が自主的に取り組める環境を作っていきたい。

今後については、ルーテルの良さである「一人ひとりを大切にする」環境を基本として、自ら考え行動できる生徒を育てていきたい。学院創立 100 周年に向けて、保護者の方の意見も取り入れながら、より良い魅力ある学校づくりに邁進したいと考えている。

理事長所見

九州ルーテル学院は、1926 年アメリカの宣教師マーサ・B・エカード先生によって学院標語である「感恩奉仕」を進んで実現する人を育成することを目的で設立され、2026 年には創立 100 周年を迎える。学院の学生・生徒・園児ひとりひとりを大切にする教育を実践するために、学院に関係するすべての人々が心一つにして日々励んでいる。

新型コロナウイルス感染症の第 5 類への移行により、以前の学校生活が戻ってきつつある中、今年度は体育大会も学院祭も制限なしでの開催をすることができた。さらに姉妹校であるインマニエルカレッジとの交換留学制度も本格的に再開できた。

地域とのかかわりも「ルーテル区役所」での取り組みが学内外で浸透してきており、昨年度 40 名だった参加生徒が、今年は 70 名を超えるほど増加した。今回評価委員の指摘にあったように、もっともっと地域と一体化で生徒の教育の場を広げることが大事だと感じている。

また、ICT 化についても今年は大きな転換期となっている。教育機関ではまだまだなじみがないゼロトラスト環境構築は、教職員への情報モラルの変革と働き方改革の両面から、教職員をサポートできると考えている。教職員の事務作業を軽減し、生徒と向き合える時間を確保できることを期待している。

学院全体では 100 周年に向けて、インターナショナル小学部の設置、正門拡張工事など計画が進んでいる。地域から必要とされる学院に向けて、生徒、保護者、教職員、さらには地域の皆様と一緒にこれからも成長を続けていきたいと思う。

これからも評価委員の方々には、いろいろな角度からご意見いただきたいと思う。

理事長 福田 邦子